

長崎丸山 はなまちマップ



まちぶらプロジェクト

絵葉書でみる 丸山風情

◀ 思案橋側から見た丸山の入り口「山ノ口」。江戸時代にあった二重門は明治5年に取り払われています。

丸山本通り。正面の山は▶ 風頭山。江戸時代、通りの石畳部は階段でしたが、人力車が走り出したことにより坂道が変わっています。



◀ 寄合町通り。左側の手前の建物は現在の丸山公園付近と思われます。各家々にはガス灯が並んで点けられていました。

絵葉書 長崎手彩色絵葉書 (ehagaki-nagasaki.com) 所蔵
昔の長崎の街並みを映し出した絵葉書をWEB (ehagaki-nagasaki.com) で閲覧できます

丸山の なりたち

長崎丸山

丸山は寛永19年(1642)江戸幕府の命を受け、長崎市内に散在していた遊女屋を1ヶ所に集めたことに始まります。丸山はかつて日本三大花街といわれ、長崎の役人や博多や上方などの商人、さらには多くの文人墨客などの社交の場でありサロンとして内外に知られていました。

また、日本人のほかに唐人(中国人)やオランダ人も訪れていた国際的な花街でした。



肥前長崎丸山廊中之風景 (長崎歴史文化博物館所蔵)



肥前長崎地図 (長崎歴史文化博物館所蔵)



長崎手彩色絵葉書所蔵

はなまち 花街とは かがい

花街とは、芸妓(芸者)の踊りなどを楽しむことのできる店(料亭やお茶屋など)が集積している都市の一面をさします。丸山のように、現在も歴史的な景観を残し、花柳界(芸妓さんの世界)が活きた花街は少なくなってきています。伝統的な花街は、芸妓を抱える「置屋」、場所を提供する「待合茶屋」、料理を提供する「料理屋」に、さらに芸妓の派遣を取り仕切る「検番」が存在するのが一般的ですが、長崎の場合は場所も料理も提供する「料亭」と「検番」が存在しています。

今も残る花街空間

表通りを1本入ると、曲りくねった路地が巡り、やや小ぶりの花街建築などが密集して残っています。

かつて待合、置屋、たばこ屋、すきやき屋であった建物があり、石畳や石垣の雰囲気もよく、いまでも花街の生活感が漂っています。長崎検番協の、梅園天満宮に続く梅園通りは、料亭花月の板塀が映える丸山随一のまちなみ景観スポットです。



長崎検番



芸妓は江戸中期の天明初年(1781)頃、大阪から長崎に入ってきたと言われていいます。明治時期には芸妓を中心とした花街文化が広がっていき、芸妓の派遣を取り仕切る組織(検番)として、長崎町検番、丸山東検番が創設されました。

昭和初期には、市内に7軒の検番(丸山には3軒)があり、数百名の芸妓が在籍していました。

戦後に存在した検番も長崎町検番と丸山東検番だけで、昭和24年(1949)に両検番が合併し、長崎芸能会を発足。昭和52年(1977)に長崎検番と改称し、現在も花街の伝統を守り続けています。



花柳界用語の豆知識

- ◆御座付(おざつけ) お座敷に付いた時のごあいさつ。その土地や季節に応じた唄や踊りでごあいさつをします。
- ◆地方(じかた) 唄/三味線/囃子(笛・小鼓・太鼓等)。
- ◆お茶を引く 芸妓さんがお客に呼ばれず、暇でいる様。暇な時間に石臼でお茶を引いたことから。
- ◆立方(たちかた) 踊りを踊る人。

長崎の伝統 しっぽく 卓袱料理

江戸時代の長い鎖国時代にも、長崎だけは海を超えた遠い異郷の地とも接触を保ち続けてきました。その間にオランダやポルトガル、中国の料理を巧みに取り入れ和風にアレンジしたものが、長崎の誇る郷土料理、卓袱料理です。

元来は、家庭でのおもてなし料理として定着したのですが、現在では長崎の伝統的な料亭料理となりました。

卓袱料理は、朱塗りの円卓を数人で囲み、大皿に盛られたお料理を直箸(じかばし)で取り分けて食べます。(史跡料亭花月ホームページより)

お献立

- 御膳 ●御飯
- 大鉢 ●香ノ物
- 中鉢 ●果物
- 小菜 ●梅乾
- 煮物

※一般的なメニューです



卓袱料理の作法 ~御膳(おひれ)をどうぞ~

卓袱料理は女将の「御膳をどうぞ」の言葉から始まります。鯛の胸鰭が入った吸い物を御膳(おひれ)といいますが、これは「お客様一人様に対して鯛一尾を使っておもてなしさせていただきます」という意味が込められています。

(史跡料亭花月ホームページより)

花街 ゆかりの地

うめその 梅園身代り天満宮



梅園天満宮は丸山町の鎮守神で、別名を身代り天満宮といい、当時、芸妓などの心の支えになっていました。芸能事などの奉納が盛んで、杜などで官許の芝居小屋が置かれ、芝居や見世物などが盛んに行われていました。

第二次世界大戦中、ここで祈願し出征した丸山町の住人は、すべて身代り天満宮のおかげで無事帰還して、今でも身代りお守りは有名です。近年、秋の大祭で「丸山華まつり」が催され、賑わいをみせています。

きよくせん 玉泉神社

玉泉神社は寄合町の鎮守神としてお祀りされ、花街の中に位置していたこともあり、夕刻の参詣者が多く、特に祭事は芸妓などの奉納踊りで賑わっていたといわれます。現在、秋の大祭では子供神輿で賑わっています。



中の茶屋(市指定史跡)

当時、中の茶屋には内外の文人墨客などが訪れ、大いに賑わい、丸山を代表する茶屋(料亭)となります。長崎奉行の丸山巡検の際には休憩所にも充てられていました。昭和46年(1971)建物が類焼し、庭園のみとなりますが、昭和51年(1976)に建物が再建され、現在は長崎市清水島展示館として、市民に公開されています。

寛政2年(1790)に奉納された手水鉢には、筑後屋のお抱え(所属)の遊女「富菊」の銘を見ることができ、当時の人気を物語っています。



ゆかりの人物

坂本龍馬

土佐藩出身の幕末の志士。長崎でも亀山社中を設立するなど活躍。花月など丸山にも足を運んでおり、「イカルス号事件」などの解決にも尽力しました。写真は丸山公園に建立されている坂本龍馬の銅像。



愛八

名妓といわれた丸山の芸妓。大正から昭和初期に活躍し、愛八が唄った「ぶらぶら節」、「浜節」は有名。なかにし礼の小説「長崎ぶらぶら節」の主人公。





史跡料亭 花月 (県指定史跡)

寛永19年(1642)に「引田屋」として創業。明治以降に「花月楼」と改称、昭和4年(1929)に廃業するが、戦後に再興します。「長崎ぶらぶら節」にも登場する料亭です。木造3階建ての旧本館と土蔵部分、2棟の木造2階建ての離れが廊下でつながり4棟の建物が現存。奥の離れは昭和19年(1943)に新築され、引田屋時代の建物は本館と土蔵と離れの3棟。



元禄13年(1700)ごろ作られた庭園は長崎三大庭園と言われています。

料亭 青柳 (長崎市都市景観賞受賞)

建物は明治12年(1879)に建てられた「料亭杉本家」であったものを改修して今に至っています。平和祈念像を作成した北村西望が長崎滞在中に



拠点として利用していました。表の石垣は、丸山花街が石垣などで隔離されていたことを物語っています。また、石垣の下には当時人力車小屋がくるまてばあり、車立場と言われていました。

長崎検番

建物は明治21年(1888)に建てられた「松月楼」を受け継いだものであり、正面は堅羽目板の壁面で1階は格子戸、2階は連子の連続する和風建築です。梅園通り側の壁面は基礎石が天草石、漆喰の壁面に1階は格子戸、2階は鎧扉と和洋折衷の外観が魅力です。表に飾られている提灯には芸妓の名前が書かれています。



山ノ口

江戸時代、長崎の人は丸山を単に「山」と呼んでいました。これが丸山の入り口を「山ノ口」という所以となります。当時山ノ口には二つの門が並んで建てられており、「二重門」と呼ばれていました。現在その跡には丸山町、寄合町の大提灯が建てられています。

中の茶屋

(市指定史跡/清水崑展示館)「長崎ぶらぶら節」でも歌われた茶屋がここ「中の茶屋」です。長崎市の史跡に指定されている庭園の奥には小さな祠があって稲荷神がお祀りしてあります。



梅園身代り天満宮

歯痛狛犬
歯の痛みがあるものが狛犬の口に歯をくわえさせると、痛みが消えと言われています。



御神牛と自分の体をお互いに撫でれば健全に、頭を撫でれば知恵が付くと言われています。

なかにし礼文学碑
長崎にブームを巻き起こした「長崎ぶらぶら節」の作者であるなかにし礼の直筆の文学碑。

恵美須石
社殿横の常夜灯の基礎石である恵美須神の顔をした石。この顔を拝むとご利益があるかも。

思案橋かいわい



「丸山にいこうかどうか」と思案しながら渡っていた橋。

思案橋を渡り、丸山の入口「二重門」が見える場所にありました。思切橋で思い切った丸山へ。

見返り柳
丸山からの帰り道、丸山への未練を断ち切れず振り返っていたことから名付けられたとも言われています。

丸山オランダ坂

出島に向かう遊妓が丸山の表門を通らず、この階段を下り、当時川であった電車通りのところから小舟に乗って出島に向かっていたと言われています。突き当たりには古民家風のカフェ・バーもあります。

